

優秀賞

— 中学生以下の部 —

「掟上今日子の紹介文」

高良和莉さん

推 し 本:『掟上今日子の備忘録』

著 :西尾維新

推したい相手:今を生きるすべての人



「掟上今日子の紹介文」 高良和莉

私は、「掟上今日子の備忘録」という本を今を生きるすべての人に推薦します。「私は掟上今日子、二十五歳、置手紙探偵事務所所長。白髪、眼鏡。一日で記憶がリセットされる。」そんな備忘録を自身の左腕に記す彼女こそが、この物語の主人公・掟上今日子さんです。その相棒的存在となるのが、史上稀に見る“この世で最も不運な男”隠館厄介です。この本は、そんな二人が織りなす、読んでてとても楽しい推理小説です。私がこの作品を知ったきっかけは、二〇一五年に放送されたドラマでした。西尾維新先生が紡ぎ出す愉快的やりとりと、なんとも素敵な世界観に私は夢中になりました。この小説で私が一番好きなお話は、第四話の「失礼します、今日子さん」と、その解決編「さようなら、今日子さん」です。まずこの二話は、もう既に亡くなってしまった、今日子さんも崇拝してやまないミステリー作家・須永昼兵衛という人物の死因が病死ではなく自殺の可能性が出てきて、今日さんは、事実を調べるべく須永先生の全著作 99 冊を読むことになって、厄介はその助手を務めることになってしまいます。しかし今日さんは一日で記憶がリセットされてしまい、正確には、一度眠るとその日の記憶を失ってしまうため、つまりは寝ずに 99 冊を読破しなければならないというお話で、果たして今日さんと厄介は、それを成し遂げられるのか、また二人が辿り着いた真相はどのようなものになるのか、その展開に目が離せなくなることでしょう。あとひとつ、この本の魅力を述べるとするならば、実は隠館厄介は事件を共にしていくうちに、次第に今日さんに好意を寄せていくのですが好きになった相手は、どれだけ距離を詰めようとしても、どれだけ絆が深まったとしても、会う度に、はじめましてで、忘れたくなくても忘れられてしまい、彼は自分の恋愛においても運が悪いのか…となんだか同情したくなります。この作文の冒頭の一文で、私はこの本を「今を生きるすべての人に推したい」と言いました。その理由を説明します。私はこの作文を書こうとしたとき、一体「誰に」推薦したらいいのか悩んでいました。けど、西尾維新先生が書いた本の後書きを読んで、誰にだって忘れたいくらい嫌な記憶はある、私にも、勿論貴方にも。ど

うして人の記憶はデータの如く、取捨選択して消去できたりしないのだろうか。いっそのこと嬉しい記憶や楽しい記憶で溢れてしまえばいいのにと。でもそれは違います。人間の記憶の中にある悲しい記憶や恥ずかしい記憶は、同じ失敗を二度と繰り返さないように残っているのだと私は思います。打ち消しの表現が続くようでしつこいですが、ただそれでもそんな嫌な記憶を積み重ねてしまえば、ひとは極度のストレスで死んでしまいますよね？もしも今、これを読んでいる貴方の身の回りの人が今日子さんのように一日で記憶を失うようになってしまったら、貴方と今日過ごした思い出を次の日には忘却するようになってしまったら、若しくは貴方がその忘却体質になってしまったなら、その時人は、どのような行動をするのだろうか。忘れてしまいたいと思った記憶は消せても、忘れたくないと思った記憶も同じように失ってしまう。そういう時に必要なことは、自分が今立っているこの瞬間を大切に生きて、後ろを振り返ってみた時に、後悔のないようにすることで、一日一日を大切にすることです。もしかすると今日子さんも、そういうことやっていくことで、生きているのかもしれないですね。そんな訳で、私の推薦理由は以上になります。最後にはなりますが、これを読んでいる皆様がどうか今日という一日を大切にしてくださいように。貴方にとってこの一冊がきっと、忘れられない本になりますように。